

詩と売淫

——ボードレールの「現代性」の一断面——

売淫はボードレールの空想のなかで大都市の群衆を膨れ上がらせる酵母である。——ベンヤミン

吉村和明

「芸術とはなにか？売淫である。」[I, 694]⁽¹⁾ボードレールは「火箭」の第一葉にこう書きつけている。このあまりに簡潔な断言だけでは、彼が<売淫>という言葉で言わんとするところを理解するのはむずかしいのだけれど、ともあれわれわれは、この言葉が彼の作品のさまざまな箇所で、「聖なる売淫」という宗教的な意味から、文字通り路頭で春をひさぐ娼婦のイメージまで、大きな意味の振幅をともなって反復され、ひとつの特徴ある主題論的連関をかたちづくっていることを知っている。『内的日記』の批評版を編纂したジャック・クレペ＝ジョルジュ・ブランは、この言葉を解説して、そこからは「金銭ずく」とか「淫猥」とかいった観念は排除されており、「けがれ」を連想させることすらほとんどないことに注意を促す⁽²⁾。たしかに『内的日記』において、<売淫>とはなによりもまず「自己の外に出」たいという欲望を名指す特異な表現であり、こうした欲望が「差異性の神話」のうちで根底的な批判を受けねばならないことはあるにせよ、<一>と<多>の矛盾のあいだで、芸術家がそれを実践的に乗り越えてゆくひとつの方途を示していると、ひとまず考えることは許されよう。「栄光とは一のままにとどまりながら、特別な方法で売淫することだ」[I, 700]と彼は言っている。

しかしながら一方でわれわれの注意を惹くのは、この<売淫>を媒介項として「芸術」と「愛」（あるいは「セクシュアリティ」と言ってもよい）がひとつに結ばれるという重要な事実だ⁽³⁾。というのも、ボードレールによれば、「芸術」とともに「すべての愛」もまた<売淫>にほかならないからである [I, 692]⁽⁴⁾。もっとも「赤裸の心」の別のある箇所ではボードレールは、「性交とは他人のなかに入ろうと欲することだが、芸術家は決して自分自身の外へは出ない」とも書いていて [I, 702]、ここで見るかぎり愛の営みと芸術的实践はおたがいにまったく相いれないふたつの対立項にすぎない。だが、精神の次元にある「芸術」と肉体の次元にある「愛」というこの二分法をあまり真に受けられないようにしよう⁽⁵⁾。その善し悪しにかかわらず<売淫>の契機を持たなければ「芸術」は不可能であるとの認識こそが、上述のような<売淫>の主題論的連関を構造化しているのであろうし、「愛」の観念論的な断罪は、「愛の身体」が、多様かつ具体的な相のもとに——その癒しがたい傷の絶望的な痛みをも含めて——『悪の華』のなかに現れ

出ることをまったく妨げないのだ。そんなわけで「愛(セクシュアリティ)」と「芸術」は、ときとしてお互いに顔をそむけあうふりをするのがあっても、深いところで詩人の密かな欲望と通じていることは、精神分析の指摘を待つまでもなくたしかなことだ。とすれば、「セクシュアリティ」の具体的な場面として娼婦の「売淫された身体」が浮かび上がってくることになんの不思議もないわけだし、そもそも<売淫>が、都市の風景の素描には欠かせぬひとつの重要な詩的対象物として、『悪の華』の詩的宇宙のなかに看過しがたい位置をしめていると知るのには、いともたやすいことなのだ。

風に揺り動かされる微かな明りの間を縫って、
<売淫>が、方々の街路に灯と点る。
それは、蟻の巣のようにたくさんの出口をひらく。
まるで不意打ちを試みる敵軍のように、
いたるところ、目に見えぬ通路をつける。
<売淫>が泥濘の都会のただなかにうごめくさまは、
<人間>から食べ物をかすめとる、蛆のようだ。(1, 95)

こうして<売淫>によって都市のなかにひらかれた出口や目に見えぬ通路は、だが、たんに近代都市に特有の風景を鮮やかに彩る点景のイマージュとしてそこに現存するだけではない。ボードレールにおける<売淫>の意義について、断片的ではあるが、もっとも示唆に富む洞察を行ったのは、管見のかぎりでは、ヴァルター・ベンヤミンである。「セントラル・パーク」のなかで彼はこう言っている。「売淫の貌が大都市の成立によってどのように変化したかは、ボードレールの文学を理解する上で決定的な問題のひとつである。なぜなら、すくなくともボードレールがこの変化に表現をあたえたこと、この変化がかれの文学の最大の対象のひとつであったことは確実だからである。」⁶⁰ このベンヤミンの言明を下敷きに、われわれもとりあえず、ボードレールにあっては、<売淫>という言葉が、その意味論的な多層性を行きつ戻りつしながら、彼の詩的言表を成り立たせる本質的な契機のひとつをあらわにしていることを確認しておくことにしよう。<売淫>が都市の内部に作り出す迷宮にそれと知らずに迷いこんだ無自覚な遊歩者は、現実的なものの錯綜と変幻の奥深くに誘いこまれ、自己の同一性を危うくするまで積極的に「けがれ」とたわむれつつ、ついに(文学という)「魅惑のあいまいな境域」(ブランショ)を生き始めるのではないだろうか。

実際、エクリチュールのありうべき淵源に向かって詩人が手探りで覚束ない歩みを始めていたところに目を向けてみるならば、<売淫>という言葉が(本来)体現している、いかがわしく謎めいた領域に身をひたすことがそのまま、言語的な体験としてこの「魅惑のあいまいな境域」を生きることであった一時期が存在していたことが知られるだろう。

ここに眠る、はした女^{おんな}らをあまりに愛せしが故に、
若くして土龍^{もろり}の王国へと降りゆきし者。[I, 204]

「はした女」たちとの交渉が「生きられた経験」として具体的にどのような状態で、またどのような頻度で行われたか、つぶさに知る必要は現在のところわれわれにはない。重要なのはボードレールの意識のなかでそうした行為が詩への意志に通底しているという事実をはっきり認識することであり、そのためには、たとえば「赤裸の心」の次のような断章を読んでみれば足りる。

若い作家が初めて自分の校正刷りを訂正する日、彼はまるで、初めて梅毒にかかったばかりの学生のように誇らかである。[I, 694]

娼婦との愛の営みにおいて詩人がわがものにするのは、彼女の身体が「商品」、さらにいえば「大量生産品」として売られているという、痛切ではあろうけれど、結局は自分と本質的なかわりを持たぬ、ひとつの知的認識ばかりではないのだろう⁹。むしろ彼にとって大きな意味を持っているのは、書くことがこうして当初から、<売淫>の毒(梅毒)の感染と不可分であるという事実であるように思える。そうした意味からいえば、彼の詩的实践について、『悪の華』を断罪した検事たちにボードレールが帰する、いわゆる「梅毒的解釈」が成立する余地はたしかにあるし、またこの梅毒すらもボードレールが自らなした選択によるものだとのサルトルの見方も、正当化されうだろう。いいかえれば、彼はこのとき、売淫され、病いに侵された娼婦の身体こそがまさに、病いとしての詩を胚胎し、増殖させる特権的な「(あいまいな)境域」にほかならないことを自覚するのであって¹⁰、こうして娼婦と詩人のあいだに存在しているらしい、分かちがたい不可思議な絆が感得されることで、ベンヤミンが述べるように、ボードレールにとって、<売淫>は避けることができない必然となるのである¹¹。

私の情婦^{おんな}は名の通った花形ではない。

<乞食娘>、その輝きはすべて私の魂からの借り物。

嘲笑う世間の目にはまるで見えぬ

彼女の美しさは、私の悲しい心の中にばかり花咲く――

靴がほしさに魂を売った娘だ。

だがこの穢^{けが}わしい娘をかえりみて、私が似^に而非^は信心家^{しんしんか}ぶったり、

高潔^{けいけつ}がったりするなら、神様はお笑いだろう、

思想を売り物あつかい、作家になりたいこの私。[I, 203]

「藪睨みのサラ」——ボードレールにおける<売淫>のテーマについて考えるとき、けっして欠かすことのできぬ神話の名前だ——を主人公とするこの詩の中心的問題は、マルセル・リュフなどが言うように、たんに(元来美しいものをことさらに醜く描く)「反=理想化」というようなことではないのだろう¹⁰⁰。改めていうまでもないことかもしれないが、「私」の主観性(「私の魂」、「私の[...]心」)と「乞食娘」の現存(その「輝き」、その「美しさ」)がここでは明らかにその「価値を交換」していることに注目しよう。重要なのはむしろ、詩人が自らの「詩の行為と場所」をどこに求めるかという、それこそ根源的な問題なのではないだろうか。いいかえれば、「思想を売り物あつかい」して「作家になろうとする「私」が、その欲望を実現しようとするのは、まさしくこの「乞食娘」の「売淫された身体」を通じてなのであるし、また逆に、彼女の「売淫された身体」は彼自身が手を染める(思想的=詩的)<売淫>を通じて初めて、ある独特の輝かしい形象を獲得するにいたる(「彼女の美しさは、私の悲しい心の中にばかり花咲く」)ということなのだ。そうしてみれば、『悪の華』全体を特徴づけと言っても過言ではないあの有名な撞着語法「おお、泥まみれの偉大さよ!崇高なる破廉恥よ!」[1, 28]が、「藪睨みのサラ」に捧げられた(とおぼしい)¹⁰¹もうひとつのテキストのなかに書き込まれるのも、おそらく偶然ではない。

きみは全宇宙を自分の臥所に招き入れかねない、

みだらな女よ!倦怠がきみの魂を残酷にする。

この奇妙な戯れにきみの歯を研ぎすますためには、

日ごとに心の臓をひとつ、餌食にくれてやらねばならぬ。[1, 27]

ここで「臥所」と訳されている語 ruelle には同時に「路地」の意味もあるから、この詩で「きみ」と呼ばれているのがたとえ「藪睨みのサラ」であってもなくても、「全宇宙を自分の臥所に招き入れようとする「きみ」の身振りとは、同時にまさしく悪所を徘徊して<売淫>的行為を行う娼婦のそれでもあると考えることができる¹⁰²。そもそもボードレールにとって「すべての愛は売淫」なのである以上、ともに「倦怠」の毒を飲み、「奇妙な戯れ」に進んで身をやつすこの詩の主人公たちふたりのあいだにかたちづくられているのも、愛=売淫の不毛かつ豊穣な関係性の一樣態にちがいない。というのも、そこからはほんとうの「子供」は生まれ出ず、かわりに「天才」が捏ね上げられるからであって、けだしこの詩で歌われているのは、一言でいってしまえば、<売淫>を結節点として成就される<詩>の生成の物語にはかならないのである。

「若い文学者たちへの忠告」で自分自身「若い文学者」にほかならぬボードレールはこう書いている。「詩にたずさわる者たち、あるいはかつて詩にたずさわってうまく行ったことのある者たちに私は、決して詩を放棄しないように忠告する。詩とは、最も利をもたらすことの多い芸術の一つである。」[II, 18] むろんこれは一種の戯文であるから、一字一句まじめに受け取るにはおよばないかもしれないけれど、少なくともこの洒落のめしたような調子の裏には、それ自体独立した固有の価値を持つべき芸術といえども、現実社会のなかに流通してゆくかぎりにおいて、金銭的価値づけを逃れることはできない、という事実に対する明晰な意識を見てとることができるだろう⁽⁹³⁾。

ボードレールの詩的実践が経済的観念と深く結び付いていることを早い時期に指摘したのは、ジョルジュ・バタイユだった⁽⁹⁴⁾。たしかにボードレールは『内的日記』その他の場所でしばしば「労働」の価値に言及し、従うべき原則としてそれを賞揚している。たとえば「火箭」のなかの次のような一節。「前進的かつ蓄積的な力である労働は、能力においても結果においても、資本と同様に利子を生む。」[I, 659] ところでボードレールにおいて「労働」と根本的に対立するのは「快楽」である⁽⁹⁵⁾。「火箭」(あるいはクロード・ピショワの分類に従えば「衛生」)のなかの別のところで彼はこう言っている。「各瞬間毎に、われわれは時間の観念と感覚におしつぶされている。そしてこの悪夢から逃れ——これを忘れるためには、二つの方法しかない、すなわち、<快楽>と<労働>である。<快楽>はわれわれを磨りへらす。<労働>はわれわれを強くする。どちらかを選ぼう。」[I, 669] むろん選ばれるべきであったのは「労働」の方にちがいないが、実際のところ彼の生涯が「生産的活動への長期にわたる拒否」(バタイユ)にすぎなかったことは、誰でも知っている。不断に前進し蓄積する力としての「労働」、無意味に力を蕩尽し、永遠の不充足のなかに人を宙吊りにする非生産的な「快楽」、この対立する二項のあいだで、意識的な態度決定と欲望の軌跡がかけちがう。いいかえれば、「快楽」を離れてボードレールの詩はありえないが——「きわめて明瞭に詩と結びついている労働への嫌悪」とバタイユはいう⁽⁹⁶⁾——、同時にそのことは「明日の優位」に根拠を置くブルジョワ社会のなかで、<詩>の存立基盤そのものを危うくしてしまうということなのだ。「ボードレールは」とバタイユは述べている、「この擾乱にみちた海原のなかに、もはやなんの責任もとることがないままに、心をみたすことなどできぬ魅惑^{フュシオン}、破壊的な力をおよぼす魅惑にただ手放しに身をゆだねてしまった、呪われた詩という陥没をきりひらいたのである。」⁽⁹⁷⁾

<売淫>という概念を通してボードレールの詩的言表のなかにわれわれが見ようとしていることの根底にあるのは、おおよそ上に素描したような、^{モダニティ}「現代性」の経験の一断面である。実際、クリスチヌ・ビュシ＝グリュクスマンが言うように「モデルニテという概念そのものが、その美学的哲学的文節の豊かさをそっくり持って現れるのは、ボードレールから」であるとするならば⁽⁹⁸⁾、この「現代性」の諸相のなかで<売淫>という概念にとりわけかわってくるのは、「神聖であることをやめ、文化的アウラ

をもたない市場のフェティシズムに委ねられた詩人の新たな身分」の問題ということになるだろう。詩の聖性をブルジョワ的社会的俗物性にどう折り合わせてゆくかという課題は、ロマン派の詩人たちによって多かれ少なかれ共有されていたプロブレマティークであった⁽¹⁹⁾。しかし、こうしたロマン派的なプロブレマティークを継承しながら、ボードレールの詩学が彼らのそれと根本的に区別されるのは、まさしくそれが「芸術の制作条件の徹底的な諸変化」の認識と不可分であるという点においてなのだ⁽²⁰⁾。いかにすればそれは、<売淫>的視点の詩的言表への内在化ということであって、もしもロマン派の詩人たちのブルジョワ社会への「抗議」が、パタイユの述べるように、たかだかブルジョワ的な個人主義の、ひとつの転倒したありやうにすぎないとすれば、それは彼らがひとしなみにこの<売淫>的視点を欠いているからだ、ということではできないだろうか⁽²¹⁾。

たとえばテオフィル・ゴーチエは『モーパン嬢』序文において、よく知られているように、ブルジョワ社会を律する公準ともいうべき「実用性」を徹底的に断罪して、至高の価値としての「美」の本質的な「無用性」を主張する。

美しいものであればどんなものでも、人生に不可欠ということはない。[...]なんの役にも立たないもののうちにしか、ほんとうに美しいものはないのだ。実用的なものはすべて醜い。なぜならそれはなんらかの必要の表現であり、人間の必要というものは、その哀れにも不完全な本性同様、おぞましく、いとわしいからである。——家のなかでもっとも実用的な場所といえば、便所ではないか。⁽²²⁾

「美」は無用であり、醜悪な「実用性」と対立するという、このゴーチエの主張は明快そのものだ。しかし注意しなければならないのは、その明快さを支える図式性であり、ここで「美」といわれていることの、実質を欠いた奇妙な抽象性である。実際「もっぱら<美>にのみ向けられる愛」(II, 111)をテーマとするこの小説で、主人公ダルバールは繰り返し「美」への狂信的な信仰を告白する、たとえば「ああ、美よ！われわれが創造されたのは、ただただ次のような目的のためだけだ。つまり、もしもおまえを見出すことができたとしたら、膝の上にのせておまえをいとおしみ、可愛がるために、もしもそうした幸運が与えられなかったとしたら、永遠に世界を巡っておまえを探し続けるために」⁽²³⁾というように。しかしこうして礼讃される「美」は、最後までアプリオリな価値として空虚な同義反復に終始され、ついにその実質が明かされることはない。「美」とは結局美しいものにのみにすぎず、むしろモーパン嬢はその理想的な具現ではあるのだけれど、いわばこの「美」を「美」たらしめているものそれ自体に対しては、まったく懷疑の眼が向けられることがないのである。こうしたところに、いわゆる「芸術のための芸術」がその原理的な根拠そのものうちに含みこむ限界を見てとることができるように思えるのだが、いずれにせよ、それはまちがいにボード

レールの詩学をそうした審美観から峻別する、本質的な相違点であるといってもよい。というのも、ボードレールにあっては、詩的主観性の定位にかんする根底的な懷疑を通じて、<詩>はときとして激しく「けがれ」の方に引き寄せられ、また逆に「実用性」の醜悪さのうちに、思いもよらぬ美的価値が見出されることもまま起こりうるからだ。そしてわれわれが<売淫>的視点ということで考えているのも、そうしたことと無関係ではありえないのである。

おお、衣服を恋しがって泣く、畸型のものどもよ！
おお滑稽千万な胴体よ！お面に似合いの胸部よ！
ねじれた、やせた、腹の出た、またはぶよぶよの、哀れな身体よ、
情容赦もなくおちつきはらった、<実用>の神様が、
青銅の産着にくるんで育てた赤ん坊の、なれのはて！[I, 12]

この若書きの作品において詩人は「裸の時代」の「気高い身体器官」を褒めたたえ、一方でそれとの対比において、上述のように「<実用>の神様」の支配する「今日」の裸体の醜さをこきおろす。見たところ、ゴーチエ的な「実用」の断罪以外のなにものでもないのだが、忘れてはならないのは、引用部分に続く箇所、詩人がおずおずながら、「遅ればせのわれらの美神たちの[...]発明」つまり、「心の下疳に触まれた顔かたち」とか、「憔悴の美」とかいった、現代に固有の美を主張し始めているということだ。「醜さそのものを」と「愛に関する慰めの箴言抄」には書かれていなかっただろうが、「利用する術を知りたまえ」[I, 548]。たしかにこの詩は、古代の賛美と現代の賞揚というふたつのまったく逆向きの詩的想念に引き裂かれ、やや混乱した印象を読者に与えもするだろう。だがそのことは逆に、すでにその出発点において詩人は、自らの詩的行為の根拠を、「芸術のための芸術」の美的ユートピアのうちには置いていないことを、はっきりと物語っているのである。

ベンヤミンの『ボードレール論』の仏訳者ジャン・ラコストは、その注記のなかで、「ボードレールの抒情詩は、抒情の、ということはつまりアウラの(社会的)不可能性の上に立脚している」¹⁰⁰と述べている。ところで、この「アウラの不可能性」、つまり芸術作品における「商品形態」のドラスティックな出現を、身体の次元でもっとも端的に生きるのが娼婦にほかならないとするなら、詩人が彼女と、ベンヤミンの独特な言葉遣いを借りていえば「感情移入」*empathie*¹⁰¹をもってひとつの空間を共にするかぎりにおいて、彼女の「売淫された身体」こそが、「アウラの不可能性」を生きる詩人の運命のすぐれて暗喩的=換喩的な表象となってもおかしくはない。

ある夜私が、おぞましいユダヤ女のかたわらに、
死体に添うた死体よろしく、横たわっていた時のこと、

この売り物の肉体のそばで、私は思い始めたのだ、
私の欲望が身を遠ざけている、悲しい美女のことを。[1, 34]

この詩はある意味で異様である。「悲しい美女」がイマージュとして喚起されるために、なぜ、「私」が「おぞましいユダヤ女のかたわらに」身を寄り添わす必要があるのだろうか？サルトルはこの詩を援用しつつ、「ボードレールの感性の当初からある図式」—— マニャックなプラトニズムの病理学的側面 —— について縷説するのだが⁽²⁰⁾、むしろ本質的な問題がそんなところにあるとは思えない。むしろ注目すべきなのは、すでにもうひとつの「サラ詩篇」でも確かめたことだけれど、詩的行為が生成する「境域」ということではないだろうか——つまりそれは詩的=身体的「欲望」がそこから遠ざけられている「悲しい美女」にではなく、そのかたわらに身を寄り添わせている「売り物の肉体」の方にこそ存するのであって、「悲しい美女」に対して想像のうちに行為される愛撫も、動詞が条件法過去(第二形)に置かれることによって、ふたりを隔てる越えがたい距離を一層印象づけているかのようだ⁽²¹⁾。詩人と娼婦のあいだにはぐくまれるアンビヴァランな共犯関係によって初めて<詩>が胚胎されるというこの事実を忘れないようにしよう。「^{スエス}敷居」をことのほか好む娼婦たちは詩人をそこに招きよせ、彼に向かって「夢の扉」をあけはなつ⁽²²⁾。そしてそこには、罪深い逸楽、死(破壊)への欲望、孤絶と汚穢の意識などなどがおりなす倒錯的世界が繰り広げられもするだろう。『悪の花』初版で「逸楽」と題され、再版で「破壊」と改題された詩のなかに読まれるのは、いわば「売淫的空間」とでも呼ぶべきこの特異な空間の詩的記述にはかならない。

こうして、息も絶え絶え、疲労困憊した私を、
<悪魔>はつれ出す、神の視線から遠く、
深く人影もない<^{アシモイ}倦怠>の平野のただ中へと。

そして、狼狽し切った私の眼に、投げこむものは、
穢された衣類やら、ひらいた傷口やら、
はては、血まみれになった、<破壊>の道具立て！ [1, 111]

血まみれになった、<破壊>の道具立て… それはベンヤミンのいうところに従えば、「ボードレールの詩のもっとも奥深い部屋で、バロック・^{アレゴリー}比喩の全権を相続した娼婦の足もとに散乱する道具」であって⁽²³⁾、いってみれば、ボードレールの詩的实践が、一種サド=マゾシストな残虐さで自らの身体に傷口をひらきつつ、ひとつの痛みとして「現代性」の問題と触れあうことを許す、かけがえのない詩的装置なのであった。

注

- (1) ボードレールのテキストへの参照はすべてクロード・ピシヨワ編のプレイヤード版2巻本全集(1975、1976)による。〔 〕のなかで、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で指示する。翻訳は『内的日記』にかんしては矢内原伊作訳(人文書院版全集第2巻)、その他については阿部良雄訳(筑摩書房版個人訳全集)による。本文の内容に合わせて訳文を一部改変させていただいた箇所があることをお断りしておく。なおボードレール以外の引用文については、翻訳は、特に断りのないかぎり、できるだけ既訳を参照しつつ、拙訳による。
 - (2) Ch. Baudelaire, *Journaux intimes*, édition critique établie par Jacques Crépet et Georges Blin, Corti, 1949, p. 204.
 - (3) Cf. Leo Bersani, *Baudelaire et Freud*, Seuil, p. 17.
 - (4) ボードレールによれば神もまた「(もっとも)売淫的存在」である。Cf. I, 692.
 - (5) Cf. Leo Bersani, *op. cit.*, p. 21.
 - (6) ヴァルター・ベンヤミン『ボードレール』(晶文社版著作集第6巻)252 ページ(以下同書からのベンヤミンの引用はすべて円子修平訳。訳文を一部改変させていただいたところがある。)
 - (7) 「大都市で売淫がとった形態においては、女は商品であるばかりでなく、精確な意味において大量生産品でもある。」(ベンヤミン、前掲書、252 ページ)
 - (8) ミシェル・ドゥギーは「ジャンヌの身体」で言っている。「身体とは境域 = 真ん中で(に)ある。」Cf. Michel Deguy, “Le corps de Jeanne”, in *Poétique* n. 3, 1970, p. 334.
 - (9) ベンヤミン、前掲書、252 ページ参照。
 - (10) Cf. I, 1231-1232.
 - (11) この詩が置かれた位置を重視して「ジャンヌ詩篇」のひとつとする見方もありうる。阿部良雄個人訳ボードレール全集第1巻499 ページ参照。
 - (12) リトレ国語辞典は ruelle の用例のひとつとして coureur de ruelles を挙げ、「ふしだらな場所に足しげく通う者(悪所はしばしば路地裏にあるから)」と記している。
 - (13) 「文芸市場におけるボードレールの態度。ボードレールは——商品の本性に関与するかれの深い経験を通じて——市場を客観的審級として是認することができた、もしくは、是認することを余儀なくされた(かれの「若い文学者たちへの忠告」を参照せよ。)(ベンヤミン、前掲書、229~230 ページ)
- 芸術に固有の価値と流通機構のなかの金銭的価値の対立は、ベンヤミンが「複製技術時代の芸術」でいう、芸術の「礼拝的価値」と「展示的価値」の対立に

通じている(晶文社版著作集第2巻19ページ以降を参照)。ベンヤミンによれば、「ボードレールにおいて詩人がはじめてその展示的価値としての権利を要求する」(著作集第6巻232ページ)のである。さらに、<売淫>という言葉との関連でいえば、prostituerの語源の意味がpro(前に)、stituer(置く)、つまり「展示」にほかならないことを、ここで思い出しておくのも無駄ではないだろう。「展示的価値」とはいいかえれば「売淫的価値」なのである。

- (14) Cf. Georges Bataille, *La littérature et le mal*, Gallimard, "Idées", 1975, p. 58 sq.
- (15) G. Bataille, *op. cit.*, p. 59. 「快楽」のために「労働」を拒むという点では、娼婦もまた詩人と相同的であるといえる。Cf. Alain Corban, *Les Filles de Noce*, Flammarion, "Champs", 1982, p. 21.
- (16) *Ibid.*, p. 60.
- (17) *Ibid.*, p. 67.
- (18) Christine Buci-Glucksmann, *La Raison baroque : de Baudelaire à Benjamin*, Galilée, p. 75. (杉本紀子訳)
- (19) この問題にほとんど愚直ともいえる誠実さで向き合ったのが、アルフレッド・ド・ヴィニーであることはいうまでもない。拙稿「詩人の運命——アルフレッド・ド・ヴィニーについて」(『千葉大学教養部研究報告』A-22, 1989年)参照。
- (20) ベンヤミン、前掲書、241 ページ。その「徹底的な諸変化」とは、ベンヤミンによれば、ブルジョワジーが「詩人にたいするその委託を撤回」ということであり、また、「市場」という要素の媒介によって「以前の詩人たちのそれとははなはだしく異なった制作法と生活法を強制」されるということである。かくして「ボードレールは、もはやどのような品位もあたえることができない社会のなかで、詩人の品位を要求することを余儀なくされ」ねばならなかったのだ(ベンヤミン、前掲書、231 ページ)。
- (21) Cf. G. Bataille, *op. cit.*, p. 64 sq.
- (22) Théophile Gautier, *Mademoiselle de Maupin*, Garnier-Flammarion, 1966, p. 45. むろんこうした主張はひとりテオフィル・ゴーチエのみに帰せられるべきものではなく、ロマン派から高踏派をへて象徴主義にまでいたるひとつの紋切型であったといえるだろう。ここではかりにゴーチエの名前によってその紋切型を代表させているにすぎないし、ほかならぬボードレール自身についても、たとえば「有用な人間であることは、私にはいつも、なにかひどく醜悪なものに思われた」(I, 679) という「赤裸の心」のなかの有名な言葉を挙げることができる(ただし、こうした言明が持ちうる射程にたいする留保として、注2)に挙げた『内的日記』批評版336 ページのコメントなどを参照)。
- (23) *Ibid.*, p. 199.
- (24) Walter Benjamin, *Charles Baudelaire, un poète lyrique à l'apogée du capitalisme :*

préface et traduction de Jean Lacoste, Payot, "Petite bibliothèque payot", 1982, p. 271.
19世紀なかごろ以降のブルジョワ社会における抒情詩の困難については、ベンヤミン、前掲書、164~165 ページ参照(「ボードレールのいくつかのモチーフについて」)。

- (25) *intropathie* は *Einfühlung* の訳語。ベンヤミンによれば、感情移入 *intropathie* の図式は二重であり、商品の「生きられた経験」(*Erlebnis*)と客のそれとを包含している。商品の「生きられた経験」とは客(金)に対する感情移入であり、こうした感情移入の「達人」^{ヴェルチュオーズ}は娼婦である。一方客のそれとは商品(価格=交換価値)に対する感情移入であり、ボードレールはこうした感情移入の「達人」^{ヴェルチュオーズ}だった。かくして「彼の娼婦に対する愛はそのような感情移入の完成されたかたちを表しているのだ。」(Cité par J. Lacoste : W. Benjamin, *op. cit.*, p. 262.)
- (26) Cf. Jean-Paul Sartre, *Baudelaire*, Gallimard, "Idées", 1970, p. 153 sq.
- (27) そうしたことと関連して、ボードレールが、金に困って投宿中のベルサイユの娼家から、サバチエ夫人宛に、際立って精神主義的な内容をもつ恋愛詩のうちのひとつ(「霊的な曙」)を書き送ったらしい、などというエピソードも思い出される。阿部良雄個人訳全集第1巻513~514 ページなどを参照。
- (28) Cf. Walter Benjamin, *Paris, capitale du XIXe siècle : le Livre des Passages*, traduit de l'allemand par Jean Lacoste d'après l'édition originale établie par Rolf Tiedemann, Les Editions du Cerf, 1989, p. 512.
- (29) ベンヤミン、前掲書、241 ページ。